

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：18001

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2021

課題番号：18H05717・19K20914

研究課題名(和文) 米軍基地で育った「沖縄系アメリカ人」のアイデンティティ形成とディアスポラの経験

研究課題名(英文) Identity formation and diasporic experiences of Okinawan Americans in US Occupied Okinawa (1945-1972)

研究代表者

山里 絹子 (Yamazato, Kinuko)

琉球大学・国際地域創造学部・准教授

研究者番号：00635576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、米軍統治下時代(1945-1972)に、沖縄の米軍基地で育ちアメリカの教育を受けた、米国籍を有する「沖縄系アメリカ人」への聞き取り調査を通して、彼らが沖縄とアメリカの狭間をどのように生きたのか、そして、現在どのように自己の人生を物語るのかに着目した。彼らのライフストーリーから、アメリカと沖縄社会の狭間で故郷に対する喪失感を経験したこと、多様な文化背景をもつ基地内学校(クバサキハイスクール)のクラスメートとの関係の中で自己のアイデンティティの形成がなされたこと、人種、階級、ジェンダーの意識が彼らのアイデンティティ形成過程に影響を与えたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、米軍統治下時代に沖縄の米軍基地で育ち、社会的にも文化的にも沖縄とアメリカの狭間に置かれた「沖縄系アメリカ人」のアイデンティティ形成過程を明らかにするものである。個々のライフストーリーの聞き取りから、人種、階級、ジェンダーの意識がアイデンティティ形成過程にどのように結びついたかを考察した。本研究を通して、戦後の沖縄社会が沖縄とアメリカの文化と社会が融合された空間だけでなく、アジアからの基地労働者など様々な文化的背景を持つ人々の生活の営みの場でもあり、人種、ジェンダー、階級の経験が交差する多層的な越境的空間であったこと、またその中に語り手のディアスポラの経験があったことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study explores the life stories of "Okinawan Americans," who grew up and received an American education on US military bases in Okinawa during the period of the US Occupation (1945-1972). It particularly analyzes their life experiences of living in-between Okinawa and America and their identity negotiations, both in their school years and in later life. Illuminating the intersectionality of race, class, and gender, the life stories of these Okinawan Americans reflect the complex power dynamics in Okinawan society under the US Occupation. The initial plan of this study to conduct field research in Hawai'i, where some participants who attended the American School on a US military base in Okinawa now live, was not possible due to the pandemic. However, I was able to collect historical documents related to the American School they attended. Participating in seminars also helped to deepen my understanding of the latest trends in diaspora studies and cultural theories.

研究分野：社会学

キーワード：ディアスポラ ライフストーリー 沖縄系アメリカ人 米軍基地 アイデンティティ 戦後沖縄 冷戦 米軍統治

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

沖縄県は「移民県」と称されるように、太平洋戦争前後、多くの人々が沖縄からハワイ・太平洋島嶼や南北アメリカ等の地域へ移住した。海外沖縄移民に関する研究は、移民排出の要因や背景、移住先での職業構成や移住分布などに関する地理学の分野で始まり(石川 1968)、文化人類学や社会学の分野において、移住先での現地調査に基づく移民やその子孫たちの生活や経験及びアイデンティティの形成や変容に関する研究が蓄積されてきた(Ueunten 1989, 白水 1998, Shirota 2007, Arakaki 2007)。また、文学の分野においても、「オキナワ系アメリカ文学」の刊行や「沖縄ディアスポラ文学」の研究が進められてきた(Stewart and Yamazato 2009, 山里・石原編 2013)。これらの研究は、これまでの日系移民に関する研究で見過ごされる傾向にあった沖縄系移民の歴史・経験及びアイデンティティの特徴を浮き彫りにした。

一方で、これまでの研究は、エスニシティに主な視点が置かれ、ジェンダーや階級に基づいた多様なアイデンティティの形成過程は十分に分析がなされてこなかった。本研究では、人種、階級、ジェンダーの意識がどのようにアイデンティティ形成に関わるのかを明らかにするため、米軍統治下時代に沖縄の米軍基地で育った「沖縄系アメリカ人」のライフストーリーを収集・分析し、彼らの語りからアイデンティティ形成過程を検証した。

2. 研究の目的

米軍統治下時代に沖縄の米軍基地で育った「沖縄系アメリカ人」のアイデンティティ形成と人種、ジェンダー、階級の意識との関係性を考察すること、そしてそれらと交差するディアスポラの経験を解明するのが本研究の目的である。

アメリカ社会における沖縄系移民に関するこれまでの研究では、異なる言語や習慣の違いにより移住先で県外出身の移民から受けた差別や文化的同化を強いられた経験、そして「郷里」と繋がりを維持した越境的な生活や創造される文化やアイデンティティ形成に焦点が当てられてきた。本研究は、戦後の沖縄社会を生きる「沖縄系アメリカ人」のライフストーリーに着目する。戦後の沖縄社会を多様な人種、階級、ジェンダーが混在する場として捉え、「沖縄系アメリカ人」としての自己と他者意識がどのように形成されたのかを考察することによって、移民研究のみならず、戦後沖縄史研究に新しい視点を切り拓くことを目的とした。

さらに、これまでのディアスポラ研究においては、離郷を強いられた人々の移住先における差別的経験から創出される理想化された故郷認識についての研究が中心であった。本研究では、沖縄の米軍基地で育ちアメリカの教育を受けたということで、「郷里」に居ながらも「郷里」社会にうまく属さない人々の経験とアイデンティティ形成過程について考察することで、ディアスポラの故郷認識の多義性を描き出すことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の主な研究方法として、米軍統治下時代に沖縄の米軍基地で育ちアメリカの教育を受けた、米国籍を有する「沖縄系アメリカ人」に対して聞き取り調査を実施した。沖縄の米軍基地内の高校クバサキ・ハイスクールの同窓会会員の最も多いハワイ州オアフ島で主なインタビュー調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため渡米ができず、県内での調査に限定することにした。

インタビュー調査は、彼らの第一言語である英語で行った。彼らの生い立ち、学校生活、沖縄の米軍基地の中と外での経験などについて聞き取り、自己や他者意識、そして故郷認識がどのよ

うに形成されたのかを明らかにした。具体的には、(1)どのように沖縄社会とアメリカ社会に自己を位置付けたか、(2)帰依する故郷やアイデンティティはどこにあったのか、それらを認識したのはどのような経験に基づくものであったのか、また(3)米軍統治下の沖縄の政治的また社会的状況をどのように捉えていたのか、などを聞き取った。インタビュー対象者の決定は、スノーボール方式をとり、パーソナルネットワークを通して対象者を紹介してもらうなど、信頼関係を築きやすくするといった工夫を行った。

次に、米軍基地で育った「沖縄系アメリカ人」の社会的文脈を理解するために文献調査を行った。沖縄県公文書館に所蔵されている米国の沖縄統治に関する一次資料、特に、沖縄に駐留する米軍人・軍属の子弟を対象にした設立したクバサキ・ハイスクールに関する資料を収集した。クバサキ・ハイスクールの同窓会の会誌の収集も行った。同窓会は現在も活動を続けていて、米軍基地で育ったアメリカ人の共同体として機能している。学校やクラスメートに関する語りを深く理解するために、クバサキ・ハイスクールの設立背景や当時の学校の様子に関する史料収集を行った。

4. 研究成果

本研究では、1945年から27年間続いた米軍統治時代に、沖縄の米軍基地でアメリカの教育を受けた「沖縄系アメリカ人」への聞き取り調査を通して、彼らが沖縄とアメリカの狭間をどのように生きたのか、そして、現在どのように自己の人生を物語るのかに着目し、個々のライフストーリーからアイデンティティ形成と交渉過程を分析した。

インタビュー調査からは以下の点がわかってきた。(1)戦後沖縄において統治する側(アメリカ)と統治される側(沖縄)の狭間に置かれた経験をした。「故郷喪失」という言葉で自己の当時の心境を表現する者もいた。(2)米国籍を保持していたため、ベトナム戦争に従軍した同級生もあり、また、家では地元女性のメイドがいるなど、当時の沖縄の人々とは異なる経験をした。(3)基地外では沖縄の親戚や友人との交流があり、戦後沖縄の歴史的出来事をアメリカと沖縄の両方の視点で捉えていた。(4)クバサキハイスクールにはアジアからの基地関係者の子弟も通っており、多様な文化背景をもつクラスメートとの関わりがあり、同じ境遇の者同士の連帯感があった。(5)出身校である基地内学校(クバサキハイスクール)に対する愛着が現在でも強く、同窓会など同級生との繋がりが維持されていることなどが明らかになった。

本研究を通して、戦後の沖縄社会が沖縄とアメリカの文化と社会が融合された空間だけでなく、アジアからの基地労働者など様々な文化的背景を持つ人々の生活の営みの場でもあり、人種、ジェンダー、階級の経験が交差する多層的な越境的空間であったこと、またその中に語り手のディアスポラの経験があったことが明らかになった。本研究の成果は英語書籍(共著)の一章として2023年に出版予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Kinuko Maehara Yamazato
2. 発表標題 Through the Eyes of Okinawan Students: Experiences in the US Military Scholarship Program during the Cold War
3. 学会等名 Oral History Workshop "Reconceptualizing the Cold War" (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------